

2008 Annual Congress "Tokyo"

2008年年次学会(東京)



日時：平成20年 7月19日(土) 11:00~21:00
7月20日(日) 9:00~21:00

会場：椿山荘

〒112-8680 東京都文京区関口2-10-8
☎03(3943)1111(代表)

Japan Small Animal Veterinary Association



椿山荘・庭園



椿山荘・庭園(夜景)

主催：日本小動物獣医師会

後援：文部科学省

(社)日本獣医師会

関東地区獣医師会連合会

(社)東京都獣医師会

(社)日本動物病院福祉協会

(特)野生動物救護獣医師協会

東京都小動物獣医師会

イヌ臨床での疼痛管理と症例報告

○上 田 一 徳
みなとよこはま動物病院

【はじめに】

当院では、ペットのQOLの確保とインフォームドコンセントの実施が一般的になっているが、疼痛管理においても《飼い主参加型医療の確立》と、《飼い主と共に行うリハビリテーション》を実施することで、ペットが受ける精神的苦痛や不安を緩和出来ている。周術前の先制鎮痛や、骨折や捻挫、脱臼などの急性痛には、オピオイド鎮痛薬や非ステロイド抗炎症薬（以下NSAIDs）を中心とした治療が展開されているが、慢性痛には疼痛のコントロールを目指して上記の投薬にサプリメントを併用する症例も多い。臨床の現場において私は、グルコサミン、ゆず成分を中心とした漢方成分配合のサプリメント（アナフォート；テルモ）を、主に慢性疼痛を伴った犬に投薬し、効果的な治療成績を得ることが出来た。よって、その症例の代表例をここに紹介する。

【治療の処方と評価】

犬において、アナフォート（50～100mg/k g）の容量で1日1～2回、症状に準じて投薬した。投薬期間は、疼痛が緩和してくるのに併せて漸減した。投薬前には一般血液検査を行い、他の基礎疾患が存在しないことを確認した。投薬中でも定期的な血液検査を行い、副反応の有無を調査した。痛みの評価は、投薬前後において定期的にVisual Analogue Scale（VAS）法（Chapman C.R et al 1992.）にて、担当獣医師と飼い主がそれぞれに実施した。

【症例 1】

ラブラドルレトリバー 12歳齢 去勢雄 体重35kg

加齢と共に足腰がふらつく、左前肢の挙上を主訴にて来院。大学病院でMRI,CT検査にて《両肘関節炎、馬尾症候群》と診断。NSAIDsの投薬に反応性を示したが、治療途中からアナフォート（100mg/k g 1日2回）投薬を併用することで、更なる疼痛緩和が得られた。

【症例 2】

雑種 17歳齢 雄 体重4.2kg

右後肢跛行にて初来院。数年前に交通事故にて臀部打撲。当院のX-ray撮影にて、《腸骨骨折の自然治癒》が確認されたが、以来、時間経過とともに疼痛が発現。週2回のレーザー治療とアナフォート（100mg/k g 1日1回）投薬にて、2週間後には跛行の改善が見られた。

【症例 3】

アイリッシュウルフハウンド 6歳齢 雌 体重55kg

起き上がり方が悪いとの主訴にて来院。X-rayにて《胸腰椎間に重度強直性脊椎症》を確認。既往歴

として、胃拡張胃捻転にて救急処置歴2回、食道アカラジア、第2度房室ブロックによる心不全が有。飼い主がアナフォートのみでの投薬を希望し、(100mg/kg 1日2回)にて投薬。3日後には、運動機能の症状にかなりの改善が認められた。

【症例 4】

プチバセットハウンド 8ヶ月齢 雌 体重9.0kg

頸部拘縮を主とする突然の激しい全身性疼痛症状にて来院。大学病院にて《犬疼痛症候群(多発性髄膜動脈炎)》と診断。プレドニゾロン(2mg/kg 1日1回)投与により、約1週間かけて症状が改善。ステロイド長期使用を懸念した飼い主と相談のもと、アナフォート(100mg/kg 1日2回)併用。予定よりも早期にステロイド剤を漸減しても、疼痛の再発は認められなかった。

【症例 5】

ゴールデンレトリバー 1歳齢 雄 体重29kg

3日間食欲低下、振戦、慢性的な四肢の関節痛を主訴に初来院。四肢の関節に熱感が認められ、X-ray検査では特筆する異常所見は認められなかった。血液検査にてWBC 23000/μL、CRP over mg/dl、股関節液中に顆粒球が多数認められた為、《免疫介在性関節炎》の仮診断にてプレドニゾロン(1mg/kg 1日1回)を投薬した。3日後に、初診時に採血した抗核抗体検査の結果が陽性と判定。5日後には、ほぼすべての臨床症状が回復した。1か月かけてプレドニゾロンを漸減して休薬するも、断続的に臨床症状再発。オーナー希望のため、アナフォート(50mg/kg 1日2回)にて3ヶ月間継続治療を行った。アナフォート投薬期間中、疼痛に関しての再発は見られなかった。

【結果と考察】

以上のように、関節炎、神経痛、血管炎など多岐に亘る症例において疼痛管理に有効な結果が得られた。現在、代替医療法としてのアナフォートの役割は、疼痛の緩和のための鎮痛薬およびステロイド剤の軽減になるものと思われる。

心配された副反応は臨床症状、血液検査上での反応は見られなかった。ただし、月単位の投薬を希望されている飼い主には、十分のインフォームドコンセントと血液検査などの定期検診が必須である。

今後の展望としてアナフォートは、外傷、先天性関節形成不全による関節炎、術前の先取り鎮痛や、自律神経失調、更には膠原病と言われている犬の免疫介在性疾患における鎮痛など、運動器に関わる様々な症例の疼痛緩和に対して期待が出来るものと考えられる。